

KAC TRIAL PROGRAM Vol.1 DANCE

二つの魂を持つハムレット

異なる言語の間で揺れる、肉体と魂

ほの暗い舞台に一条の光を浴びて、長身の痩せた男が立つ。金色の髪は伸びてもつれ、身には簡素な白いシャツとパンツをまとうのみ。骨ばった手足はむき出しのまま。目は伏せられ、じっと床を見つめている。内省的で繊細な男、という印象。ふいに高い電子音が響き、観客は舞台上のもう一人の登場人物を知る。黒衣の女がシンセサイザーを弾いている。彼女の指は鍵盤の上を流れるように滑り、そこからはシンプルな、しかしどこか、もの狂おしい旋律があふれ出し、会場を満たす。その流れに身をゆだねるように彼は舞い始める。動きはシャープでダイナミックだ。

長い腕がのびやかに空間を切り裂き、手指がほの白い軌跡をうす闇に残して、あるべき場所に収まる。足指はゆったりと大きく孤を描き、舞台の上を横断し、跳躍し、そして木の床を掴み、踏みしめる。

最初の弱々しい印象は消え失せている。男の全身からは迫力のある野性的な魅力が発散され、内面には荒々しい生命力が渦巻いているのが伝わってくる。その力強さが観客に安心感を与える。と、同時に緊張を強い、期待を高まらせる。次に何が起こるのかと。

少しずつ、ひそやかに、ダンサーの息づかいが荒くなっていくのが私たちに伝わる。そしてついにその口から声が発せられる。

「To be, or not to be…!!」

「存在し続けるか、まるきり消えてなくなるか、悩むところだ…!!」

そう、彼は悲劇の王子、ハムレット。生きるべきか死ぬべきか、そのどちらにも強い情熱と執着を寄せ、どちらを選ぶべきかの内面の苦悩を二つの言語で吐露する。彼はまだ、どちらか一つを選ぶことができない、この舞台の上に居る間は。英語と日本語、どちららかを選ぶことができないように。

母国語以外の言語を習得するのは別の魂をこの身に宿すことだと誰かが言っていた。アベル・コエリョーのハムレットはまさに二つの魂を、欲望を、身の内に宿している。生ける

力を振り絞って死を請い願うこと、同時に、死に物狂いで生きようともがくこと。相反する二つのエネルギーがぎりぎりの均衡を保って、ダンサーの肉体を、精神を極限まで追い詰める。

二つの言語で問われる叫びは何度も繰り返され、その度に肉体の動きは苛酷さを増していく。細い長い手脚は片方が片方の手脚を打ち据える鞭のように、空を切り、しなり、容赦なく叩きつけられる。肉と肉、骨と骨のぶつかる音が聞こえるほどだ。それは観客に恐れと、ある種の嫌悪感すら抱かせる。しかしその苦悶、錐の先で突かれるようなすどい痛みこそが “わたしは、今、生きている” というリアルな思惟の矢となって私たちの胸を貫く。奥底にまで届く。

観客はそれを耳で聴くのではなく、心で感じる。死を想いつつ生きる。この古くて新しいメッセージこそがコエリョーの肉体と魂が、舞台から私たちに投げかける “声” なのではないだろうか。

大山 縁